こころの光

凡聖の卷

前編

一心十界……一
十界五具……三
心變十界……一七
十界三位……二三

後編

十二光圖……三九

一心十界

宇宙全體が一大心靈、物心無碍「ビルシャナ」なる大親である。其絶對大靈から分現したる太陽及び地球等の世界性も大靈の一分であるから矢張り其子である。世界から産出せられたる衆生も矢張り其分身であるから靈性を持つて居る。大親は大造化である故太陽や地球も又親の子であるから中造化である。衆生も又小造化である。人類其他一切生物を通して皆生殖作用ある所より推知せらるべし。宇宙全體としての大靈中に有らゆる衆生實に無量無邊である。けれども是を概括して十界に分類することが出來る。佛敎には一切の法界十界を以て總括す。宇宙間の萬類を身と心と國土とを十法界を以て攝して遺すことなし。宇宙全體唯一のビルシャナ十法界の性相を具備して居る故現象世界にも十法界が存在す。

十法界本一心の分類であるから本に歸すれば一心である。然らば一心何故に十界と

類現するか。一心十界の理を示さん。

一心理具十界事造十界と云ふ。理具十界とは本來理性に十界の性を悉く具備して居るから善惡迷悟の十界に現出することが出來る。若し本能に其性が具せざるものならば如何に外界の緣に遇ふも現出する譯はない。それを理具十界と云ふ。又たとひ理性には十界と成るべき本能が有すと雖も事實の上に造り出さゞれば具體的に現すことは出來ぬ。それを事造十界と云ふ。歸する處人には十界の性能が具有して居るけれども一生に亙りて實生活の上に人格の核を成熟せしむる結果に十界に分類することになる。

人の性の說は種々ある。孟子は人の性は善なり。人本性は善なれども形質の私慾の爲めに本性が隱れて端なくも惡を作すのであると。又其反對なるは揚子の說である。氏は人の性は本來惡である。捨てゝ置けば我儘勝手の惡人になるにきまつてゐる。よつて聖賢の敎を以て矯正し愛に始めて善となると云ふのは性惡說である。

十界互具

今佛敎の天台說に依れば性具說即ち個々の本性には迷悟十界の性能が本來具有してある。若し本々性に具して居らぬ物ならば如何にして善とも惡とも發現することが得られやう。各自の個性は個々皆別々の樣に見ゆれども其根底には深く宇宙一大心性とも云べき如來藏性から生み出されたる個々の故に宇宙間に有ゆるところの善惡迷悟十界の理を具に有つて居ると云にある。

基督敎では他の動物と人類とは神が別に造りなされたのであるから本性が同一でない。他の動物性を覺魂と云ひ、之に對して人の心性を靈魂と名けて此兩者は根本的に異つて居るものと說く。佛敎では然うでなく人類と動物とは各々別々に異つては居るが其根底は同一心性である。故に理に十界を具すと云ふ。

生物進化說に云ふ。一切の生物界を通じて其根本に遡れば同一の根元から出たので

ある。始めて地上に發生した生物は實に極小の生物で有つたが漸次に進化して今日の文明的人類にまで進化したのである。故に凭く進化した。人類と雖とも發生學に依て見れば初め胎内に宿りし精子は原始生物の夫と異たことはない。其微少の微粒が胎内十月の間に原始生物から種々の階級を經て進化したる歴史を繰り返して人の子の形と成つて生るゝのである。故に原始生物は已に人類に進化すべき伏能を有つて居たと云ふも敢て過言ではなからん。

何にしても心性に一切の十界が悉く具有して居ると云はゞ實に人の心の内臓ほど複雜極まつた物はない。宇宙間の一切の萬物は悉く心中に有つて居る。一切萬物の心は本宇宙全一なる如來藏性の縮小の一分子である。故に一分子即ち小宇宙である。小宇宙は大宇宙を縮小した子であるから大宇宙に有ゆる眞理を悉く個性に具有して居る迷も悟も善も惡も地獄餓鬼畜生の三惡道もまた三善道も聲聞緣覺菩薩佛界も具に自身に具つて居る。若し己の情に違戻する境遇には忽ち瞋恚の焰が胸中より燃え立つこれ地獄の火種にあらずや。嫉妬慳貪は餓飢の心。愚痴卑劣は畜生の心、憍慢勝他は修羅の心。義務と同情とは人間の心。博愛公德は天上の心。靈妙感應を信ずるは聲聞の心。人生を自覺したいとは緣覺の心。或る境遇に他を救ふ爲に己を忘るゝ如きは是菩薩の心。神尊を尊信する宗教心は是佛心の分である。恁の如く人々自己の心中に何分か十界の心性具備せざるはない。十界の中或は善の方に又惡の方に傾き易き性質は持つて居るかなれども其奥底には十界の性分が伏藏して居らぬ物はない。然れば即ち云何に惡の方に發達した人たりとも本具の佛性潛伏す。故に性格を失ひ墮落の淵に沈淪しても良心の苦悶を感せざる程にもあらざるべし。また公憤義憤の禁ずる能はざるを覺えん。地獄墮落中より自覺の光に照されて先非を悔ひ善に改むるもあり。又如何に善良の人とても決して油斷はならぬ。肉體の中には地獄餓鬼に落す處の肉慾我慾の潛伏するあり。或機會に遇はゞ忽ちに憤火に地獄を現し酒色の餓鬼に沈むことの恐れあり。故に人には十界悉く具す一旦墮落の底に沈みても救濟の資因なきに非ず。又人

は如何に大悟徹底すと謂ふも酒色の爲に沈淪の憂怖なしとも云はれぬ。一切の個々十界を具有するからである。

今佛敎から云はゞ若し先天の性が全く善とか又惡と定つたならば本性の善から如何にして惡の果を結ふべき、又惡の性をいかに改めても善とは更ふべからず。今佛敎に性具とは、先天の性に迷悟善惡具さに具有すと云ふのである。先天に具有すれども後天の事實の上に善惡十界の何れにか造り出して形成せしむると云ふのである。

先づ迷悟の性相さ述べん。

心の本體は本善惡迷悟に非ず、十界に非ず實に心眞如何とも思議すべからざる靈態である。其本體は絶對の大靈無限無定性。然れども無相の相は相ならざるなく、十法界の性相を具す。本體は絶對なる大靈、之は如來藏心と云ふ。其一分子が差別界に現れて衆生心、即ち衆生の心が本一大心を根底として居る故に心十界の性を具有してゐる。十界何れにもなり得らるゝ性を具して居るなれども中に就いて生涯に亙りて最も重きに墮す。經に業道は秤の如く重きもの先づ率くとは此の謂である。

十界の相。十界一心を二に、迷と悟、迷を凡夫と爲す。六界あり。悟を聖人と爲す即ち四聖なり。迷とは自性清淨隱覆して無明に覆はれて自ら自己清淨の靈性具するを知らず。

迷と悟とは喩へば迷とは睡つて夢中に於るが如く、悟とは覺醒せる如く、覺醒と夢中とは其心の相は異れども心の體は一である。若し覺と夢とが心體全く同一にあらざれば、覺めて夢中の事を記憶する勿かるべし。亦覺と夢と其心相に於て同一ならば夢中に種々恐怖喜悅の事を見るも覺めたる時は其事實にあらざるが如し。

凡夫は覺性まだ覺めず。無明の眠に生死の夢を見る。聖人は無明の眠覺めて正覺の光明を以て顯るゝ故に佛陀は覺者と譯す。

心の迷へる凡夫の心に又二つに分れ善と惡とす。善は天理に契ふが故に上に向つて

登り惡は眞理に叶はぬが故に下に向つて墮落す。善の中に其性情と及び行爲の上に即ち一生の行業の程度は自ら輕重あり。即ち意志性格の度及び生涯に亙つての行爲の上に等級的に分れて三等とす。精神逆惡にして惡業最重きものは地獄道を作る。肉慾我慾等が病的となりて中品の惡業を造るものは餓鬼道に墮落す。人間の常なる常識明けぬ本能的動物的生活に等しきは惡の輕き者は畜生道に落つ。この惡の三階を三惡道と爲す。

三善道は修羅人間天上。善道に三等あり。憍慢勝他の動機から起す善は下品の善行爲にて修羅道、常識を完うし健全なる人格具はりて常倫の人道を履行する者は人道と爲す。次に公明正大博愛仁慈賢德なるものは天道である。

善を三等に分つはヴントが道德動機を四階に立てたると同じ。

十界を三品に分ち、一重は大宇宙全體十法界。

人類中十法界。人類即ち世界一切の人類を人格を形成せられたる性格智愚賢不肖道德、不道德、上佛陀神仙賢聖賢哲より下惡道に至るまで其の人格の迷悟善惡種々の方面に向つて類別し若し詳に之を類別する時は實に其性格相同しからざることは實に無量なり。然れども之を十法界の模型中に攝することを得べし。

ウィルヘルム、ヴント曰く、「道德程度四階あり。

四、名譽を思ひて自ら制す（不道德の行爲を避くるに止る）

三、自己の敎育習慣境遇及び隣人の善行に制せらる（不道德の行を恥忌する）

二、良心の滿足を求むるにあり。良心の滿足、永久の幸福、然れども良心已外に大なる標準なき爲に判斷を失ひ邪路に入るあり。

一、良心が最高の指導を得て最終の完備に達す。

生命の道德的理想。理想を以て行爲の一切を率ゐ之に順歸せしむる。此理想は生命

全體の道德的發達の趨勢より自己の長久且つ遠大なる生活の目的に調和せしめて之を得るなり。又曰く過去は目的たる能はず。現在は寸秒間一過せば目的たる能はず。道德の目的は大なる理想、理想は常に我と共に進み常に我の達せざる所にあり。然れども人の行爲益進まば終に最終限界に達せざるべからず。此限界の埒外が即ち理想と現實との合一する境なり。而も此境は人力の及ばず。故に倫理は理想を以て人の達せざるものと爲さゞるを得ず。之を達し得べしとするは宗敎の範圍なり。感識世界以外の道理を以て記號的の公式と爲し感識世界を補くるもの即ち宗敎なり」と。

（以上は眞筆）

（以下十一頁より十六頁までは速記術者の速記）

覺めました覺者に四通りあります。聲聞、緣覺、菩薩、佛。迷の方には惡と善とがあります。同じ惡でも三通りに分けまして、重い惡を地獄、中等が餓鬼、輕いのが畜生であります。善にも三通ありまして、善は善でありますが、驕慢心を元にして褒められたい〳〵の心から出る善は僞善である。修羅道である。中等が人間、それから公明正大の心から出る善が天上でありまして、三通りに分つて居ります。之を六道と申します。斯の如く人間には十界を持つてゐます。そこでいかに善い人でありましても人間の心の中には人を殺す心を持つて居る。それが因緣によつて出すのと出さずに濟む人とあります。人の持つてゐる良いものを見ると欲しい。良い人を見て嫉む。さう云ふ心を持つて居ります。捨てゝ置いてよいならば何も今日敎育に修身課の要はありませぬ。捨てゝ置けぬから修身課を設けて之を矯正して行くのであります。彼の二宮尊德はいかゞです。神樣でもなければ佛樣でもない。正しい道を歩いて行つたからで

あります。天上と云ふものは世の日輪様のやうな心であつて、世の爲や人の爲ならば自分の身を犧牲にして盡すと云ふ人があります。日輪様の惠を一人でも享けぬ者はありませぬが、一向平氣で恩を恩と思はぬ人が澤山あります。日輪様は公明正大であつて敬つても御禮を言はなくつても公平の惠を與へて呉れる。人間でも其通り日輪様のやうな心を持つて居る人は天上〔す〕るのであります。私は三河の國で刈谷と云ふ處で傳道をしました處が老人達は斯う云ふ事を云はれました、此處は元と原野でありましたのを、立派な田地にしましたので、今から何十年昔は原野でありました。「イヨタ」と云ふ人がありまして其人が矢矧川の上に灌漑用水を作りまして今日は立派な田地が七八千町歩出來ております。夫れが自分では自分の財産を棄てゝやつたのであります「イヨタ」は神様である。元と原野であつたのを立派な田地にしたのであります。夫れです國家の爲め人の爲めに身を犧牲にしても差支ないと云ふのが日輪様の心と同じ心であります。夫れが天上するのであります。身體が人間であつても餓鬼道、畜生道の人もあります。身體を見れば人間であるが精神を見れば、人間ではありません。人は形の上から見れば餓鬼ではない。畜生ではないと云ひますが、人間の精神の上から見れば有るのであります。

今度は聲聞と緣覺と菩薩と佛でありますが、菩薩が充分に出來ますれば佛になるのであります。

聲聞と云ふのは悟の方で小さいのであります。

（此の間速記原稿四頁脱落）

手から水を出さうと自由にする力を持つて居るのであります。それだけの羅漢でも貴君の椅子に乘せて仕事をせよと云へば出來ますまい。私の仕事も羅漢に出來ませぬそれならと云つて私も羅漢の働は出來ませぬ。自分が出來ぬから他人も出來ないと疑ふのは違つて居ると思ひます。と云つた所がそれを聽いて手を拍つて能く分つたとお禮を申すと云ふことでありました。何事も、精神をそこに用いて誠心誠意やりますれば其の道に成就する。働が出來ます。羅漢様は水に溺れぬ火に燒けぬと云ふ迄に一心にやりました結果出來たのであります。聲聞はさう云ふ風な事をするのが目的ではありませぬが、そんな事も出來るのであります。小さな我を亡してしまつて天地同根となつて肉體の力小さな我死んだり生れたりして六道の中に迷つて居るから之を脱するのが羅漢であります。それから緣覺と申しますのは（　）通りありまして初は無明であります。我々の心が暗いのであつて明るくないのであります。だうして生れてどこに行くか分らぬ。夢我夢中であります。暗の中に居るやうなものであります。闇の中に居るけれ共業力と云ふ働がありまして、それによつて善も惡も作つて居ります。全く自分の心が（天地同根）となりますれば、不生不滅となつて、六道の中に迷はぬのであります。業がある限りは死んだり、生れたりするのであります。譬へて言ひますれば私が此處に持つてゐる此物をどちらにか投げます。すると力がはいつてゐるだけは先方に行きます。投げて途中で落さうと思つても落ちませぬ。其の如く我々一生の間はいつた力が先方に行くのであります。業力が無くなりますると悟りでありまして不生不滅の境涯天地同根となるのであります。人が殺される、丁度好い幸だと云つて何とも思ひませぬが、殺された者は死んでも怨を返さずに置くものかと云へば、之が迷つて居るのであります。業力があつて死んだり生れたりするのでありまして、

（速記原稿一頁脱落）

業を結んで死んだり生れたりするのを無明の心であるから理が分らぬからさう思ふのでございます。緣覺と云ふのは十二因緣の自分の精神の迷の働き明るくなつて眞理の夜が明けて見ますれば無明の夢がなくなつて夜が明るくなります。明るくなれば迷ひませぬ。迷ひませぬから惡業を作らぬ。佛の境涯になるのであります。佛と菩薩は一つであります。

（少しく中絶）

菩薩が十分に圓滿に悟を得ましたのが佛であります。同じ悟でも聲聞よりも緣覺よ

りも大きいのであります。聲聞緣覺は自分一人が悟れば宜いが佛の悟はすべての人を佛にしなければ自分も佛になりませぬと。聲聞緣覺は人は別である私が幾ら食べたとて他人が滿腹するものでもない、その如く自分が佛になる外はありませぬと云ふのが聲聞緣覺であります。菩薩はさうでありませぬ。身體は我とは別でありますが身體は同じ宇宙の中に受けて居るのではないか元々同じ大いなる親から受けた身體なり精神であります。元へ遡れば一つである。人を助けるが自分も助るのである。天地同根大きな心を持つて我々と人と同じ佛になるのが菩薩であります。それが圓滿に出來たのが佛であります。人には佛になる靈を持つて居るのでありますから佛となることが出來ますのであります。心一つにして十界を持つて居るのであります。

（以上一一頁―一六頁速記術者の速記）

心變十界（以下眞雄）

心變とは、一心、內的生命たる心は、不思議なもので、此の心の性は本來不變と隨緣とあり。本性は不變であるけれども、一面には緣に隨つて種々に變轉す。十法界の身も心も悉く一心から變現した物である。水てう物は本水素酸素の化合物であるけれども其の水の性は不變なれども、隨緣して濕氣には流動物として滾々として流れ氷點已下の寒氣には氷つて結晶して固形體となり、熱の高度には蒸發して氣態と變ずる如く、心性は不思議にして心は無形にして定相なく、善惡に非ず、迷悟にあらず、色にあらず、心の意識にあらず、一切の分別の相を離れたるものであるが、隨緣して種々の象と現はる。或は迷ふ時は善惡六道の相と變じ三惡の相となれば、恰も水の氷と結びたる如く、修羅人間天上の三善道の身と心と世界とに變ずれば水の流動態となる如し、三善四趣の一切の惑と業と苦との相。心が解脫して四聖法界と變ずれば水が

蒸發して氣態と成るが如し。三界六道の全法界の一切の相は一心の變現ならざるなし

宇宙全一の心から變現したる一切衆生の心、種々無量なれども之を概括して十法界とす。地獄から佛界に至るまで十法界に各三世間を有て居る。身と心と國とである。十界の身も心も其の受くる國も本一つ心の變現されたる、自己の主觀たる心も客體の世界の萬物も此身も皆本は心の變現したる象である。心生ずれば一切の法生じ心滅すれば一切の法滅す。十法界の依正色心三千の相象は、悉く心の變現である。實に心恆ど不思議なものはない。炎々たる地獄の猛火も獰猛なる獄卒も心の變現である、又餓鬼畜生も心から變化したるもの、乃至諸佛の相好光明智慧慈悲も清淨莊嚴の國土も悉く一つ心の變現である。常に惡邪に向て働く時は心が變じて地獄の因を作る。故に極苦の地獄の身と變現す。常に如來を信念して憶念して止まざる時は薰習同化して佛心と變ず。佛心と變ずるが故に其の因に報ひて佛の相互光明の身と變化す。喩へば此の肉體を構造する元素が魚鳥の身と組織せらるる肉が人間の食物となれば人の同化力に依つて身の肉と變ずる如く、心識も亦六道四聖種々の身心と變化す。故に十界の身心及び國土も悉く一心の變現と說くのである。目的とする處は、常に如來を信念して、如來の光明に同化せられ、光明生活に入るにあり……

衆生心を大に分ちて二面とす。迷と悟とである。迷を凡夫と云ふ。迷の中に善と惡とに分る。惡に上中下の三等あり。是れ地獄餓鬼畜生の三惡道である。善にも三等に分けて下は修羅道、中は人道で、上品は天上道である。三惡三善合して六道即ち六凡法界と云ふ。悟には三等あり。下品は聲聞乘。中品は緣覺乘にして、上品は菩薩と佛陀とである。此を四聖法界と云ふ。合して十法界である。

本一つ心が迷と悟と分れる心の相は喩へば心の濁水と清水との樣なものである。又例へば迷者は睡つて夢を見て居る如く、悟者は覺醒めて居る樣なものである。覺者と夢中とは心の相は同じくない。然れども心の體は一である。若し覺と夢とが心の體が全く別物なれば、夢中の事が覺め終つて後に記憶中に有る事が出來ざるべし。又覺

と夢中とが全く心の象が同一ならば夢中に恐ろしき事も覺めて見れば跡方もない。故に覺と夢とは心の相は同一でない。凡夫は佛性未だ覺めず無明の眠中に生死の夢を見る中に善惡の業に依つて三善道と三惡道との樂と苦との業感を夢みて居るので、聖人は無明の眠り覺め生死の夢醒めて正しく大覺の妙境を見て居る。故に佛を覺者と云ふは正しく無明の眠りから覺めた聖人を云ふのである。

先づ六道四聖の因果を明さば初め六道の中三惡道に、地獄とは六道の中に於て最極の苦を受くる處、邪見を以て極惡を造りし者が落る處、此に惡罪業の輕重によりて感ずる處同一でない。八大地獄乃至一百三十六地獄等あり。逆惡邪見の心から倒さまに懸けられ、惡業の熱火に燒かれて、其の惡業の薪のあらん限りは消えず、火の中に劇苦を受く。地獄の事は正法念經等に詳かに說いてある。

餓鬼とは飲食を求むるも得がたく常に飢渴の苦を受くる者。之に九種あり。先づ二を擧げて見れば、有財餓鬼と無財餓鬼である。有財餓鬼と云ふは業感力の故に飲食は眼前に在りながら其身大きく口は針の如く小さくして受食すること能はず。其は我欲から惡業を重ねた報ひである。世に金錢財物は山の如く積めども我欲の病的に墮して慈善若しくは公共の爲めに供する事は出來ぬ。總べて財欲とか又は名譽權利位置を貪ぼるに通常を超えて病的に陷つたものは先づ有財餓鬼の性格と云ふならん。無財餓鬼とは肉欲の病的から造り出す業報である。飲食を求むる事を得る事なくして飢渴の苦を受く。即ち世に己が活業に勉めず、唯色に荒み酒に沈み肉慾の强き習慣性が終に病的に墮して餓鬼の性となる。

畜生は又傍生と云ふ。橫暴な心意にして橫なる行爲より造出すと云ふ。世には橫暴にして虎狼に等しき暴なる橫行者あり。又浮氣にして正しき行爲の出來ぬ事恰も禽の輕く空を橫行するが如きあり。又世には公平なる道理が分らずして實に蠕動たる蟲の如くに愚痴にして自分の思ひた一途より外に理の分らぬ類がある。形こそ人間なれ其心意と行爲に於ては實に畜生に劣るもの多し。猿の樣になまざかしく狐の樣に人を欺き虹蜆の如くに人をさし毛蟲の樣に人に嫌はれる族は世に多いではないか。已に畜生の性あり。焉んぞ其の果なからん。斯く三惡道は惡の心の傾きと及び行爲の上に三面に又三等に分ちて三惡道を造り又三惡道と成るのである。

十界三位

（以下二十三頁より三十八頁まで速記術者の速記）

十界三位となつて宇宙全體を一つにしてビルシャナと云ふ大きなものになります。個人と云ふものを大きくすると宇宙全體大きなビルシャナと云ふ佛であります。宇宙全體の中に生きとし活けるものは種々ありますが十界であります。宗教では畜生だけでも三十六億の種類がある。人間にも餓鬼道もありますが十界の中に攝取してしまふのであります。そこでそれが大の十界であります。宇宙全體を小さくしたものが地球であります。人間の中にも十界があります。世界中の人間、日本人なら日本人だけの中にも賢人も居れば愚人もあり惡人もあれば善人もある。之を分類すると十界になります。監獄は人間の中の地獄であります。一家の家庭にも地獄があります。善い事をすれば奬勵する爲に褒美を呉れます。惡い事をすれば暗い所に入れて置かなければならぬ。之を惜むからではない。何とかして善良なる人にしたい爲めであります。小

さな兒童は國家の監獄に入れることは出來ませぬ。五六歳の兒童が惡い事をした時横濱の監獄に入れると云つてもそんな事は分らぬから何とも思はぬけれども惡いことをすると暗い所に入れると云へば怖いと思ひます。之が家庭の地獄であります。もう少し大くなりますと家庭の地獄ではいけませぬ。國家の地獄に入れて矯正しなければなりませぬ。國家の地獄は丁度小さな幼年には家庭の地獄は分るが國家の地獄は分らぬ人間の宇宙の理法の分らぬ人は幼年と同じことで國家の地獄は分らぬ同じ樣に宇宙の大法が分らぬ者は身體は三十歳の年齡に達しても心は幼年であります。それが少しく大きくなりますと横濱の監獄が分るやうなもので智慧が延びて來れば宇宙の大法も分つて來て宇宙の地獄は餘程怖しいものであるといふ觀念が出來て來ます。抑も人類の國家と云ふものは何に基いて出來たかと云へば、宇宙の大法に基いて出來たのであります。宇宙の大法にないものが特に出來たものでありませぬ。それですから地獄は家庭にも國家にもまた宇宙と云ふ大きな國家にもあります。人類の中に十界がありまして釋迦や基督は人間の中の佛であります。斯の如く別けますれば地獄と餓鬼と人間もあります。人間の心の中に地獄も餓鬼も畜生も佛も持つて居ります。爾うして善い方を開發して行きます。さうすると惡い働も善用するやうになつて行きます。

そこで十界の三位に別けまして個人を大くすると人類であります。之を復た大くすると宇宙全體であります。物はどんな微細なものでも大きなものから微細になつたのでその性は失ひませぬ。米を絹篩に掛けても米の性を失はぬ。蕎麥でも其通りであります。その如く小さな個人となつても宇宙全體の形を持つて居るのであります。我々個人の中に十界ありますが、其の中に親の許に歸趣するには何れの心を以てせば行けるかと云ふに、儒佛二道に基いて人格標準を定れば、

仁——不殺生
義——不偸盜
禮——不邪婬
智——不　醉
信——不忘語

人の三格

非人格
- 心邪に惡を行ふ——地獄
- 肉慾我慾の病的——餓鬼
- 本能的動物生活——畜生

人格
- 勇——修羅道
- 智——人道——道德
- 仁——天道

聲聞——羅漢仙人等の神道
緣覺——哲學者發明者
菩薩——佛陀光明生活者

今日では人格と云ふことを研究して人格の標準は今日の學說から種々に述べて居りますけれども從來の佛敎とか儒敎とかでは人格の標準をだう云ふ風に立てゝ居りましたか、今日明白に云はぬが古昔から人格の標準は立つて居りました。そこで簡單に述べて見ますと、身體は人間でありましても人格は備つて居るものは稀であります。そこで儒敎では五常と云ふ。佛敎では五戒と云ふ、不殺生、不偸盜、不邪婬、不醉、不妄語、之を完うして保つて行くものは人間として人間の義務を盡して人格を保つべき筈に定つて居るものであります。佛敎では因果の種子を蒔けば其の通りの實を結ぶ。人間は五戒を完うして義務を盡して行きますれば人間の權理は失はぬ。五戒を保つて行くのが人間である。

佛敎で物を殺す勿れと云ふのが仁を失はぬ爲であります。仁と不殺生とは孔子の所謂惻隱の心は仁の端なりで、人間には可哀想にと云ふ仁の性を持つて居る。可哀想と云ふのと可愛とは似て居るが違つて居ります。例へば鳥の樣なものでも自分の子は可

愛いから大切にします。併し鳥には仁と云ふ同情がありませぬ。可愛いと云ふのは生理上の本能であります。可哀想と云ふのは理性から來る感情であります。蓄類は理性が無いからであります。理性は道理を明るくする心でありますから、例へば他人が苦むのも自分の苦むのと同じであるから不憫であると云ふ感を起す。蓄生は理性がありませぬから推量することが出來ませぬ。同情を寄することが出來ませぬ。人間には理性から推して如何にも可哀想であると云ふ同情心があります。仁は即ち之であります

そこで孔子の說かれた例にもあります通り人を殺すやうな惡人でも子供が井戸に落ち掛つて居るのを見ますると可哀想と思つて助ける、之は親から禮を云つて貰ふ爲めではない。天性持つて居る仁の德からであります。佛敎で物を殺す勿れと云ふのは何の爲でありますか、唯だ殺すから惡いと云ふのではありませぬ。快意を貪る爲にやるのは不可と云ふのでございます。習慣は第二の天性で屢々殺して快意を貪り居ると仕舞には可哀想と云ふ仁德を失つてしまふから惡い習慣を作つて仁を失ふなど云ふことであります。人間理性があつて、此心が起きますので人間に理性がないと眞暗であります。それが所謂蓄生であります。

或暴戾なる王があつて井の中に毒蛇を入れて其中に人を落す、すると非常に苦む、それを見ながら酒を飲むのが一番快樂であると云ふ。普通の人間であれば仁と云ふ道を持つて居ればそれが出來ませぬ。暴惡の人は逆でありますから樂いのであります。爾う云ふものを傍生と申します。殷の紂王の如きものであります。そこで佛敎で物を殺す勿れと云ふのは我々が蟲を殺すのも其物を殺すよりも殺生と云ふのは大變範圍が廣うございます。動いてゐるものを殺すばかりでなく、慈悲心を以て物を殺す勿れですべて天地間にあらゆる物は天の使命を受けて出て來て居るのであります。例へば此のコップでありますと之はコップの使命を受けて來て居りますから大切に使へば何ケ年も使へますか知れませぬが粗忽に使へば壞れてしまふ。すべての物がさうであります。すべて天の使命を受けて來て居るから殺さぬやうにしなければなりませぬ。我々

の着物でもさうであります。此着物を活用しなければ殺すのであります。時間でもさうです。大切に活用しますれば宜しいが何の益もなく使へば何の役にも立ちませぬ。釋迦さんのやうな豪い人になるのも詰らぬ人間になるのも天から受けました時間と勢力を如何に活用するかしないかそれによつてわかれるのであります。同じ八十年の時間を充分に活かして行つたものは豪い人になるのであります。それを殺した者は人間の價値がない者であります。凡ての物は殺さぬやうにしなければなりませぬ。行誡上人の歌に「いたづらに枕を照すともしびも思へば人の膏なりけり」と。だゝ照す燭火と思へど實は人の膏から成り立つて出來たものである。それを何となく唯だ照すものだと思ふと殺してしまふのである。すべての物は活用して行く爲めに出來てゐるのでありますから活用して行かねばなりませぬ。其の中一番殺していかぬのは自己の靈性であります。世界の物を悉く殺すよりも自己の靈性を殺すのが罪の最も大なるものであります。自己の靈性を活かして行けば蟲を殺すことも出來ませぬ。眞つ直ぐが人間で横樣が畜生で、逆が地獄であります。人間は持つて居る所の五常を完うして行くのであります。

それから次に義であります。

佛敎では不偸盜と申します。盜む勿れ。(羞惡)道でないことをすると體裁が惡いと云ふ心を人は持つて居ります。良心が咎めて赤面となる。之は人間は理性を持つてゐるからしてはならぬことをするから感情に訴へて赤面するのであります。然るに蓄生はさう云ふことはありませぬ。即ち理性がないからであります。人間は他人のものを盜む勿れと云ふのは義と云ふことを知つてゐるからであります。例へば他人の仕事をしてそれだけの賃銀を取りながら一時間休めば一時間盜むのであります。すべて人間盜むことが出來ぬやうに羞心を持つてゐるのは天然自然に興へられました德であります。蓄生には分りませぬ。他人のものを盜むと監獄に入れてこれは其の惡い病氣を治す爲に監獄に入れるのであります。人間は廉恥心があるからかやうな所に居つては

體裁が惡いと云ふことに氣が附いて來るのであります。之が出來て正しい道を守つて行くのが天の使命を完うするので人間爲すべき當然のことであります。それを盜むからすべての罪惡を作るのであります。

それから禮であります。

……（此間速記原稿二頁脱落）

その是非が分るのが智慧であります。蓄生は生れながら是非善惡が分らぬ。人間でも善いも惡いもあるものかと云ふ人は蓄生であります。人間はチャンと之を完うするやうに智慧が與へてあります。

それから信であります。

不忘語、詐る勿れ。理性が人間にあるから人と約束した事は背いてはならぬと云ふことが分ります。蓄生にはそれが分りませぬ。人間にはチャンと理性があつて信を失はぬやうになつて居ります。それを無視すると蓄生であります。もつと逆にすると地獄であります。

五常と云ふものは其の範圍は廣いか知れぬが是だけのことをやつて行けば人格の備つた人と云ふのであります。能く世間で常識と云ふことを言ひます。之は人格の備つた人の智慧であります。人格の備つた（　）智慧が常識であります。五常の理に叶つた智慧であります。それから割り出して理性の眼で分つて法律上でも道德上でも分つて人格が備つた行爲をして行くのがそれが卽ち常識であつて人格の備つた人であります。

人格に三種と申しまして非人格と人格と靈格とあります。地獄餓鬼畜生は非人格であります。道德上人間の資格が備つて居らぬ。心邪にして惡を行ふ。主觀的に精神の內面の惡を邪見と云ふ。客觀的に外に現はす惡を惡と云ふ。邪は逆の邪見でありまして惡いことを惡いと思ふ。主觀的に精神的の惡であります。その最も重いのが地獄であります。同じ重い中にも八大地獄（百三十六）地獄に分れるのは罪の輕重に因るので

あります。

餓鬼道。肉慾我欲の病的になつたのであつて、肉慾を恣にするに自分が働かずにやる。それが一生の間に漸次習慣が性となつて餓鬼道に墮ちてしまふ。食べたいとか肉欲の爲に樂をした。爲めに盜賊をしても恣にしやうと云ふことになつて遂には飲むも食ふことも出來ぬやうになります。我慾と云ふのは自分の財產のみを主張して他人の物を取り込むのであります。人間は食ふて行きさへすれば宜しいとか別に良いことをせぬでも惡い事をせぬければ宜しいとか思つても、學校の生徒にしても溫順しい惡い事をしない其の代り授業の時間に何にもしませぬ溫順しいからと言つて後の結果は如何でしやう。勉强しなければ落第します。惡いことをしないから宜しいではありませぬ。勉る爲に生れて來たのでありますから勉强しなければなりませぬ。

勇ばかり强くても智を缺いで居るのが修羅道で人格の中でありますが智があつても仁を缺いで居る、之が人道であります。さうして仁を持つて居る之が天道であります

それから靈格であります。靈性を開發して行くのが聲聞で消極的に（用いて）行きますのが緣覺でありまして、積極的に（用い）行きますのが菩薩であります。

人生の歸趣は、全く天の父の許に歸る者は人間に生れて自分の靈性を開發して全く本覺の下に歸ることが出來る。人生の目的を全く達する者は如何なる人であるか之が大乘佛敎である。聲聞もなく緣覺もありませぬ。千里眼のやうに見えても立派な及第ではありませぬ。そんなものは目的ではありませぬ。大乘佛敎で人生の目的を達するのは菩薩に於て達するのであります。菩薩は斯う云ふ風になります。菩薩は菩提薩埵で菩は佛で薩は凡夫であります。凡夫の人間に佛と云ふ菩提の光明が分りました人を菩薩と申します。さうしますと喩へて見ますと斯うなります。

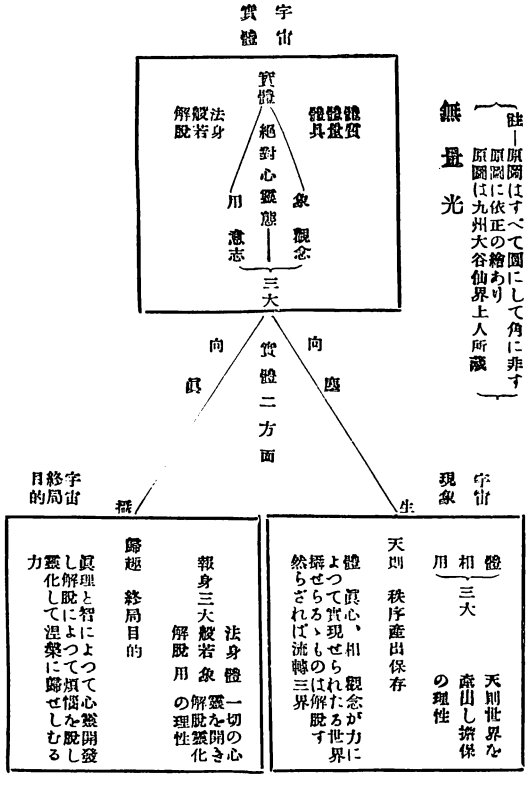
薩陀は凡夫でありますから月のやうなものであります。菩提は天道樣であります。人間は斯うして活きて居る食ふばかり肉體の爲に活きて居ると云ふのは薩陀だけの人間であります。月は元來暗いものであります。太陽の光を一部でも受くれば三日月位

になります。人生大靈の光明を受けて八十年間大きな天父のお惠みによつて活かされて居ります。眞理の光明を受けて永遠不滅の境涯に入ると云ふのが三日月位であります。さうなれば菩薩の仲間にはいつたのでございます。之を五十一に別けたのは位置が漸次に進んで來るのであります。眞言宗には十六に別けてあります。それは月に喩へたのでございます。自分の精神に信仰の光明を受けますと初めは三日月の如く漸次に進みまして十四日の晩に至ると觀音樣であります。十五夜の如くになると凡夫の心がなくなつて卽ち薩陀がなくなつて佛になるのであります。菩提にいるのであります。此の世界では釋迦如來がそれであります。法然上人の如きは十日の夜位であります。お經の中に初發心の菩薩と言つてありますが之が三日月のやうなもので、三日月は人が珍重しますが五日になりますと珍らしく思ひませぬ。無神論であつた人が漸次信仰の光に接して何だか心の中が熱くなつて來ると側から見ますと、あゝ云ふ無神論の人が不思議であると言つて珍重がる慣れて來ると自分でも思ひませぬが他人も珍重せぬやうになります。卽ち慣れて來るからであります。

さう云ふ工合で正しき人生の歸趣は何う云ふものかと云へば人生と言ふものは偉大なる天の惠を受けて活かして置かれるので、それは永遠の光明に攝取せんが爲である。我々はそれを自覺して行くと云ふ志を發して永遠の光明に進む爲の人生であると云ふことを知つた生活が菩薩であります。

トルストイの人生觀に初めは人間はなるべく出來るだけの榮耀榮華をするのが最幸福だと思つて居つたが漸次肉體の樂と云ふものがしまひには惡くなつて非常に煩悶して其極に至つて心の中に光明を發見しました。人生と云ふものは理性の光明を以て靈性に進んで行くことを發見しますれば、それから自分は非常に愉快になつたと云つて居ります。人間が肉慾の爲に使はれて居るのは可哀想なものである。死の爲めに働いて居ると云ふことを說いてあります。佛敎でも活計と死計とあります。活計の爲めに宗敎を信ずることが出來ぬと云ふのは死計であります。肉體の爲に活計が立たぬと云ふのであります。肉體は何うなつてしまふか、しまひには死ぬのであります。多くの人の活計は死計であります。死なない靈性に活くるのが活計であります。永遠不滅に働いて行くのが活計であります。人生の歸趣は靈的活計であります。（以下斷絕）

（以上二三頁より三八頁此所迄速記術者の速記）



無量光

註—原圖はすべて圓にして角に非す
原圖に依正の繪あり
原圖は九州大谷仙界上人所藏

無邊光

天則　天然生理規定の主觀客觀世界現象

二面相　絕對觀念態又一切諸

歸惡　心靈開發靈界

即ち觀念界

四面

俗　アラヤ識　認識　吾人が認識の境　天地即ち人間の經驗の內面の如し

眞　大圓鏡智　觀念態　心靈開きて觀念靈徹せるは一大個人の靈觀念に顯現せしの表の如し

俗　世間科學等の智識　又意識　又自然界の啓示

眞　妙觀察智　叡智態　佛知見開きて如來の內容を知見する智如來內容法界遍心窓開く所に啓示す

俗　生理機能の動物と同じき自己及種族保存の生類及世界我々所の如き

眞　平等性智　理性態　心靈開きて個人の理性と致一萬物一體、生佛不二

俗　物質的分子に對する感覺の性能

眞　成所作智　感覺態　心靈的感覺的心像、靈開きて感ずる五妙莊嚴、正二報莊嚴

四〇

無碍光

如來彌陀の靈能、無上菩提

如來眞理の光明　無上智慧　無上智慧ありて人の心靈に對して無上道に向上せしむべき光

倫理　神聖　無上智慧

天則には天命亦天理宇宙主宰者無上權理ありて圓鑑的理智なり

如來本願力を以て規律にとつて衆生を攝取する靈能

如來靈能の力正知見に、性に隨ふものは選擇本願力によつて攝取せらる主我には不正不善の根本故に我をすて、

正義

天則の方面には天道は正義にして貴れは惡は賤くまる、正明は閻魔王は反邪の中の一方は選びの二面取捨るが正義の理性なり

如來慈悲を以て萬類を無明惡の中より救ひ出し知見を與へ大我に融合し惡質を脫却し聖化して如來に攝取同化する性能なり

恩寵

天則には宇宙萬物を愛育し世に天の恩惠とは是なり

四一

無對光

（註－原圖は綾）

一體異方面

理法界

5

蓮華藏界

十佛自境界

事法界、重々無盡

○性德一法界

4

密嚴淨土

大日如來

3

理智不二

常寂光土

如々理智

清淨法身ビルシヤナ如來

理性智力德に宇宙觀

1

感覺

淨土

又樂天國

2

感情　樂邦　只榮光と靈爾のみ

極樂

又樂國

四三

無對光

至善至眞至美眞理の靈界、絕對觀念界に存在す

實在靈界

一切無明煩惱脫したる唯如來の界、三身即一、三德致一、十方三世諸佛聖衆を統一する唯一如來唯佛與佛十佛自境界

無對　絕對神靈態

佛身　ビルシヤナ如來常寂光

土　藏世界　蓮華藏

及佛土　無盡色相光莊嚴如來

清淨土　金剛莊嚴極樂光明

世界　大日如來密嚴淨

淨穢即常寂光。世界は焚き盡さるゝも此土は安穩とは是なり。

理想淨土

已に心德靈的生活的理想の淨土に安立して八面玲瓏歡天喜地

絕對觀念態　理想淨土

如來大我の中に住し有漏の穢身はかゝわらず心は淨土に栖み遊ぶとは之なり之を有余涅槃と云ふ

天則統一の理性を以て宇宙の本質とすれば天則の世界は未だ開發せざる靈界なり

天則的現象宇宙

現宇宙は終局目的ある、靈性を發はるべき如來胞管の世界

四二

（註―四の原圖は如來尊像）

無對光

無住所涅槃

無余涅槃
唯一心靈應

有余涅槃

四四

（註―原圖は繪）

無邊光

1

事相

2
所所作智

3
衆生の三昧に相應して啓示する智慧
妙觀察智

相象

4
光明遍照
如來平等性智により
て照す時は
平等性智
一切衆生平等
一子

5
如來大智慧光明
大圓鏡智
宇宙周遍す

四五

無碍光

如來の用
事相の力用

恩
龍

1
恩龍親の子を思ふ如く
念佛衆生を罪惡の中より
攝取す
爲めに報應二身を現して
慈悲を表す

（註―原文は繪）

2
如來の智慧力威神光明
最尊第一
神聖
智慧光明に照管せられ
たる吾は良心を發揮し
神聖にして犯すべから
ざる觀

3
如來選擇力は己をす
てゝ如來に歸するも
のを義として攝取す
正義
正義は消極に私をす
てゝ積極には如來の
聖意に協義務的に行
動す

四六

炎王光

知力の垢無明を照破す

法身　觀者

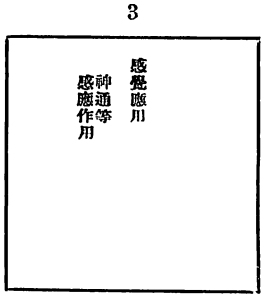
消極的方面

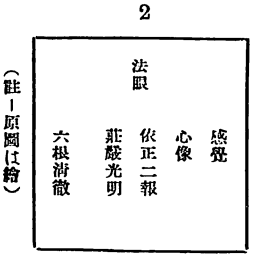
苦惱感情
罪惡感情
苦障　感情垢

主我
世界的動機
幸福快樂主義
衆障　意志垢
菩提心に障る消極の
方面

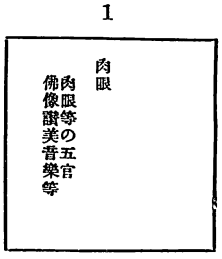
四七

清浄光



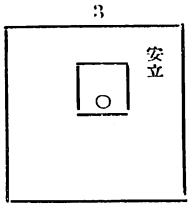


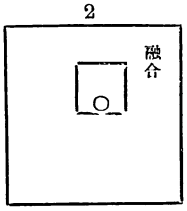
（註—原圖は繪）

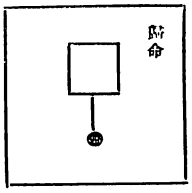


四八

歡喜光

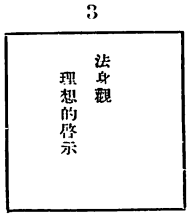




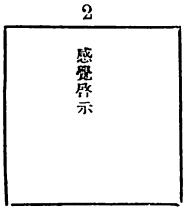


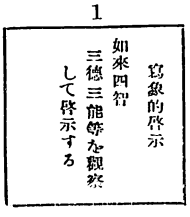
註—原文は內部の四角は如來尊像白圓は衆生の面相、黑圓は衆生の背相

智慧光



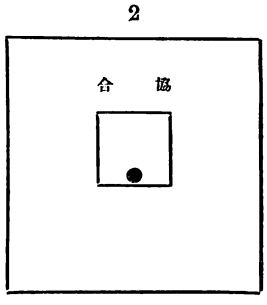
（原文は繪）



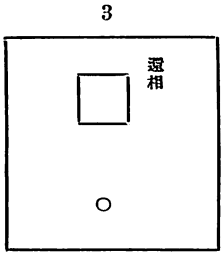


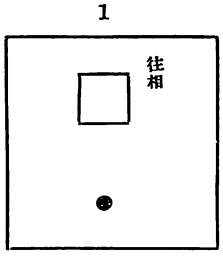
四九

不斷光



註—原文は內部の四角は如來尊像黑圓は衆生の背相白圓は衆生の面相





意志信仰三方面

五〇

昭和五年八月廿八日　印刷
昭和五年八月三十日　發行
誌代郵稅共　年貳圓
編輯兼發行人　山崎辨成
牛込區早稻田鶴卷町四〇三
印刷人　小林七太郎
牛込區早稻田鶴卷町四〇三
印刷所　靜文社印刷所
東京市小石川區水道端二丁目四十四番地
ミオヤのひかり社
振替口座東京六六八五一番